

米

収穫後のほ場管理

農業経営支援課 山村 哲平



秋耕をして来年のガス発生を防ぎましょう

稲わらが来年まで残っていると、気温の上昇と共に急激に分解されてガス害の原因となります。収穫後に耕運を行い、稲わらの分解を促す事で、春々夏のガス発生量を抑える事ができます。次の資材を施用することで稲わらの分解をより促進できます。

- ・石灰窒素 (10 ～ 20 kg / 10 a)
- ※ジャンボタニシ軽減駆除も兼ねて
- ・わらゴールド (30 ～ 45 kg / 10 a)

土壌改良資材を積極的に施用しましょう

ケイ酸質資材施用の効果として、登熟が向上し粒太りが良くなります。また発根を促進し、茎や葉を丈夫にするので倒伏や病害虫に強くなります。

- ・ケイ酸加里プレミア34 (60 kg / 10 a)
- ケイ酸と加里の相乗効果で根張りが良くなり根が活性化します。
- ・とれ太郎 (80 kg / 10 a)
- 作物へのケイ酸吸収が高く、リン酸・苦土・石灰を含むので稲を健全に育てられ、収量や品質の向上につながります。
- ・オイスターミネラル (100 kg / 10 a)
- カキ殻とケイ酸のダブル効果で強い稲づくりができます。

来年度の雑草を減らす

刈取り後、まだ雑草が生育している時期に除草剤を使用することによって来年の種子や越冬する雑草を減らすことができます。

- ・クロレートS粒剤 (20 ～ 25 kg / 10 a)
- ・プリグロックスL (100 ～ 150 L / 10 a)

※右記の農薬は毒劇物になります。お買い求めの際は、印鑑の持参をお願い致します。